

自己愛傾向と恋愛イメージ，恋愛様相の特徴

神谷 真由美・尾原 拓也

Narcissistic Tendency and Characteristics on Love Image and Immature/Mature Love

KOYA Mayumi and OBARA Takuya

【要旨】本研究の目的は、自己愛傾向の類型により、大学生の恋愛イメージ、恋愛様相にどのような特徴があるかを、性差も含めて明らかにすることであった。大学生290名（男性115名、女性175名）を対象とした質問紙調査を行い、自己愛傾向（評価過敏性—誇大性自己愛尺度；中山・中谷，2006）と恋愛イメージ（恋愛イメージ尺度；金政，2002）を測定した。対象者のうち、現在交際相手がいると回答した84名（男性32名、女性52名）には、加えて恋愛様相（恋愛様相尺度；高坂・小塩，2015）を測定した。誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の得点の組合せから、対象者を両高型・誇大型・両低型・過敏型・中間型の5群に類型化した。その後、恋愛イメージ、恋愛様相を従属変数とした自己愛傾向による類型×性別の2要因分散分析を行った。恋愛イメージでは類型の主効果、性別の主効果が有意であった。恋愛様相では類型、性別、交互作用において有意差は認められなかった。結果から、自己愛傾向による類型で恋愛へのイメージに差があることが示されたが、実際の交際相手との関係については類型による差が示されず、今後も検討が必要である。

【キーワード】大学生、自己愛傾向、恋愛イメージ、恋愛様相

問題

青年期の自己愛傾向と類型

青年期は最も自己愛が高まる時期と言われ（小塩，2004），非臨床群を対象とした横断的調査で、自己愛傾向は高校2，3年生をピークに（中山，2007），その後は低下することが示されている（Foster, Campbell, & Twenge, 2003；原田，2012；目久田・百瀬・越中，2017）。原田（2012）によると青年期の自己愛傾向の高まりは、両親からの精神的離脱のプロセスにある青年の自我が弱体化するなかで、その防衛として高まるとされる。また小此木（1981，1999）によると、青年期の自己愛傾向は、自己の過大評価や傲慢な態度、権威への反抗といった形をとるが、やがて自分を越えた理想像への同一化、自我理想、アイデンティティといった、開かれ社会化された形へと発展するという。このように青年期特有の自己愛傾向の高まりは、青年の自立や発達の促進に重要な役割を持つ。しかし一方では自己愛傾向の高まりから、周囲の反応に敏感で傷つきやすく、様々な症状や不適応を引き起こす青年もいる（神谷，2018）。

自己愛傾向研究においては、近年、対人的スタイルの特徴により2類型に分けて捉える視点が一般化している。2類型とは、自己顕示的で他者の反応に鈍感な誇大型自己愛傾向と、他者の反応に敏感で注目されるのを避ける過敏型自己愛傾向である。この2類型は、当初は自己愛性パーソナリティ障害を記述する際に用いられていたが、現在では非臨床群の自己愛傾向の研究（例えば、相澤，2002；Hibbard, 1992；中山，2007；中山・中谷，2006）にも当てはめられる（神谷・上地・岡本，2012）。また非臨床群の青年を、この2類型の高低の組合せをもとにサブタイプに分類する研究もみられる（中山・中谷，2006；小塩，2004；清水・川邊・海塚，2007，2008）。

自己愛傾向と恋愛との関係

青年期において、恋愛は重大な関心事のひとつであり、青年期になると多くの人は、他者と親密な関係になることを望み、実際に恋愛関係を構築していく（高坂・小塩，2015）。自己愛傾向が高い者の恋愛には以下のような特徴がみられるという（寺島，2011）。誇大型自己愛傾向が高い者ほどパートナーが自分に熱中

しているとポジティブに認知を歪め（小塩, 2000）、関係を継続させたいというコミットメントが低く（Campbell & Foster, 2002）、浮気が多く（Campbell, Foster, & Finkel, 2002）、攻撃的な方法でパートナーをつなぎとめようとして失敗し、失う結果に至る（Jonason, Li, & Buss, 2010）。一方で、過敏型自己愛傾向の高い者は、パートナーからの拒絶に対して過剰反応（Besser & Priel, 2009）することが示されている。

以上から、自己愛傾向の高い青年の恋愛には特徴があり、場合によってはパートナーを傷つける可能性がある。パートナーと長期的に安定した関係を形成することは難しいことが推測される。このため、大学生の自己愛傾向と恋愛との関連を検討することは臨床心理学の観点から有意義と考えられる。

恋愛に関しては、本研究では恋愛イメージと恋愛様相を扱う。恋愛イメージとは、個人の持つ恋愛へのイメージや恋愛観、すなわち、恋愛という事象に対する期待や態度を示す（金政, 2002）。金政（2002）によって、「利他的・付加価値」、「大切・必要」、「相互関係」、「独占・束縛」、「成長」、「衝動・盲目的」、「献身的」の7因子からなる恋愛イメージ尺度が作成されており、女性は男性よりも「成長」といった恋愛イメージを、男性は女性よりも恋愛を「献身的」なものとして捉えやすいという結果が示されている。

恋愛様相とは、愛を親密性、情熱、コミットメントという3つの要素で説明する愛情の三角理論（Sternberg, 1986）をもとに、高坂（2011）が、現在進行している恋愛関係のあり方を把握するものとして作成したモデルである。恋愛様相モデルでは、「恋」と「愛」は対極におかれ、「恋」には「相対性（相手を他の人と比較したり自身の条件に合致しているかで評価すること）」、「所有性（相手を物理的・時間的・心理的に占有し、相手の精神的なエネルギーを常に自分に向けたままにさせようとする）」、「埋没性（生活や意識の中心が相手や相手との関係になり、それ以外の物事に対する関心や意欲が低下すること）」という3つの特徴が、「愛」には「絶対性（他者との比較を超えて相手の欠点や短所も含めて相手の存在そのものを受容し、認めること）」、「開放性（相手の幸せや成長のために自身の精神的なエネルギーを与えること）」、「飛躍性（相手や相手との関係を基盤として、それら以外のものにより一層興味や関心が増し、挑戦や努力をすること）」という3つの特徴がある。個人が認知する現在の恋愛関係は、「相対性—絶対性」、

「所有性—開放性」、「埋没性—飛躍性」という3次元の3点のパラメーターを結んだ三角形で表され、関係がより親密になるほど「愛」の方向に進むことが想定される。高坂・小塩（2015）により恋愛様相尺度が作成されており、18～34歳を対象とした調査では、対象者を3つの年齢群に分け、性別×年齢群の2要因分散分析を実施した。その結果、性別の主効果のみ有意であり、男性よりも女性の方が「恋—愛」得点、「所有性—開放性」得点、「埋没性—飛躍性」得点が高く、愛の傾向が高いことが示されている。

本研究の目的

以上より本研究では、自己愛傾向の類型により、大学生の恋愛イメージ、恋愛様相にどのような特徴があるかを明らかにすることが目的である。その際、恋愛に関する2つの指標は、先行研究で性差がみられているため性差も含めて検討を行う。

方法

(1) 調査対象者 A県の私立大学生290名（男性115名、女性175名）、平均年齢19.08歳、標準偏差0.98歳であった。学年の内訳は、1年生126名、2年生143名、3年生12名、4年生9名であった。

(2) 調査手続き 質問紙調査を実施した。講義時間終了後に、受講者に調査への協力依頼を行った。その際、質問紙への回答は任意であること、成績に影響はないことを説明し、回答をもって同意を得たものとした。調査時期は、2019年5月～7月であった。

(3) 調査内容 ①フェイス項目：性別、学年、年齢を尋ねた。

②自己愛傾向：評価過敏性—誇大性自己愛尺度（中山・中谷, 2006）を使用した。本尺度は、過敏型自己愛傾向を測定する「評価過敏性」8項目と、誇大型自己愛傾向を測定する「誇大性」10項目の2下位尺度、全18項目から構成される。回答は5段階評定で、得点が高いほどその傾向が強いことを示す。

③恋愛イメージ：恋愛イメージ尺度（金政, 2002）を使用した。本尺度は、「利他的・付加価値」6項目、「大切・必要」6項目、「相互関係」4項目、「独占・束縛」3項目、「成長」3項目、「衝動・盲目的」3項目、「献身的」3項目の7下位尺度、全28項目から構成される。回答は7段階評定で、得点が高いほどその傾向が強いことを示す。

④現在の恋愛関係に関する質問：現在の交際相手の有無について「いる」「いない」を選択させ、「いる」

場合には交際期間（○年○か月、○の箇所は自由記述）に回答を求めた。

⑤恋愛様相：④で現在交際相手が「いる」と回答した84名に、恋愛様相尺度（高坂・小塩，2015）への回答を求めた。本尺度は、「相対性—絶対性」5項目、「所有性—開放性」5項目、「埋没性—飛躍性」4項目の3下位尺度、全14項目から構成される。回答は6段階評定で、得点が高いほど各下位尺度の右側（愛；絶対性，開放性，飛躍性）の傾向が強くなり、得点が高いほど各下位尺度の左側（恋；相対性，所有性，埋没性）の傾向が強いことを示す。

結果

測定尺度の検討

評価過敏性—誇大性自己愛尺度、恋愛イメージ尺度、恋愛様相尺度の各下位尺度に対して α 係数を算出し、信頼性の検討を行った（Table 1）。恋愛イメージ尺度の「利他的・付加価値」6項目について α 係数を算出したところ $\alpha = .60$ であり、十分な信頼性が得られなかった。このうち「恋愛は付加価値にすぎない」の1項目を削除した場合、 $\alpha = .72$ となり、十分な信頼性が得られたため、以降の分析では1項目を削除した5項目の得点とした。その他の下位尺度については、いずれも $\alpha > .70$ であり、十分な信頼性があると考えられる。

Table 1
各下位尺度の α 係数

下位尺度 (項目数)	N	α
評価過敏性—誇大性自己愛尺度		
評価過敏性 (8)	290	.84
誇大性 (10)	290	.86
恋愛イメージ尺度		
利他的・付加価値 (5) ^a	290	.72
大切・必要 (6)	290	.86
相互関係 (4)	290	.86
独占・束縛 (3)	290	.74
成長 (3)	290	.77
衝動・盲目的 (3)	290	.74
献身的 (3)	290	.70
恋愛様相尺度		
相対性—絶対性 (5)	84	.86
所有性—開放性 (5)	84	.80
埋没性—飛躍性 (4)	84	.73

a. 本来は6項目であったが、十分な信頼性が得られなかったため1項目削除した。

自己愛傾向による類型化

中山・中谷（2006）、清水他（2007, 2008）を参考に、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の平均

値・標準偏差をもとに、対象者の得点の組み合わせから5群に分類した。分類基準をTable 2に示した。誇大型自己愛傾向の平均値・標準偏差は $M = 24.71, SD = 7.05$ 、過敏型自己愛傾向は $M = 22.76, SD = 6.31$ であった。誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の得点がともに平均値から $\pm 0.5SD$ の範囲（ $21.18 < 誇大型自己愛傾向 < 28.24$ の整数域 $22 \sim 28$ 点、かつ、 $19.60 < 過敏型自己愛傾向 < 25.92$ の整数域 $20 \sim 25$ 点）にあたる対象者を中間群とした。また、Figure 1に各類型の人数を示した。

自己愛傾向による類型と恋愛イメージ

自己愛傾向5類型の恋愛イメージの特徴を検討するため、性別（男性，女性）と自己愛傾向による類型（両高型，誇大型，両低型，過敏型，中間型）を独立変数、恋愛イメージ尺度の7下位尺度を従属変数とする2要因分散分析を行った。Table 3に結果を示した。

Table 2
自己愛傾向による類型の分類基準

類型	分類基準
1. 両高型	誇大型自己愛傾向が25点以上、過敏型自己愛傾向が23点以上で、中間型でないもの
2. 誇大型	誇大型自己愛傾向が25点以上、過敏型自己愛傾向が22点以下で、中間型でないもの
3. 両低型	誇大型自己愛傾向が24点以下、過敏型自己愛傾向が22点以下で、中間型でないもの
4. 過敏型	誇大型自己愛傾向が24点以下、過敏型自己愛傾向が23点以上で、中間型でないもの
5. 中間型	誇大型自己愛傾向が22～28点の範囲にあり、かつ過敏型自己愛傾向が20～25点の範囲にあるもの

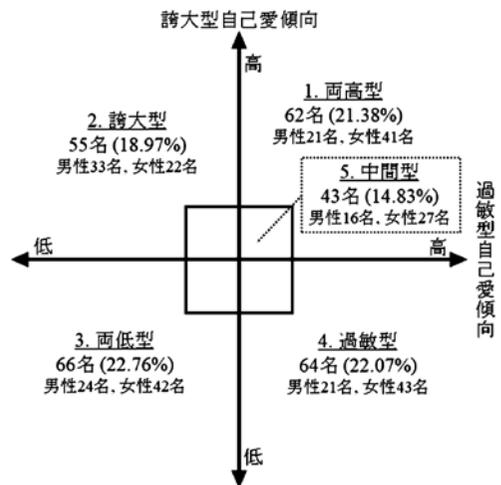


Figure 1. 自己愛傾向による類型と人数

Table 3
自己愛傾向5類型における恋愛イメージの平均値（標準偏差）と2要因分散分析の結果

下位尺度		1. 両高型 M (SD)	2. 誇大型 M (SD)	3. 両低型 M (SD)	4. 過敏型 M (SD)	5. 中間型 M (SD)	全体 M (SD)	性別主効果 F (1,280)	類型主効果 F (4,280) 多重比較	性別×類型 交互作用 F (4,280)
利他的・付加価値	男性	17.10 (5.29)	15.91 (5.03)	14.54 (5.55)	15.10 (4.90)	14.25 (5.88)	15.46 (5.29)	1.03	0.79	0.98
	女性	15.00 (5.39)	14.05 (5.74)	14.36 (4.93)	14.30 (4.68)	15.93 (5.17)	14.70 (5.10)			
	全体	15.71 (5.41)	15.16 (5.36)	14.42 (5.12)	14.56 (4.73)	15.30 (5.44)				
大切・必要	男性	27.57 (6.71)	26.45 (7.67)	21.04 (6.81)	25.48 (6.85)	27.31 (5.70)	25.47 (7.21)	2.98 [†]	8.01**	3 < 1,2,4,5
	女性	29.41 (5.67)	30.00 (8.21)	23.10 (6.54)	26.56 (8.13)	26.26 (6.75)	26.78 (7.39)			
	全体	28.79 (6.06)	27.87 (8.01)	22.35 (6.66)	26.20 (7.70)	26.65 (6.33)				
相互関係	男性	21.24 (4.24)	22.42 (5.15)	21.79 (3.96)	22.24 (3.39)	22.00 (3.78)	21.98 (4.22)	3.67 [†]	0.68	0.18
	女性	22.66 (3.29)	23.09 (3.58)	22.12 (3.54)	23.37 (3.66)	22.96 (3.14)	22.81 (3.45)			
	全体	22.18 (3.67)	22.69 (4.56)	22.00 (3.67)	23.00 (3.59)	22.60 (3.38)				
独占・束縛	男性	13.19 (4.27)	11.64 (4.13)	10.25 (4.02)	13.67 (3.43)	10.69 (3.82)	11.87 (4.11)	2.68	5.78**	1.10
	女性	13.63 (3.06)	12.59 (4.29)	10.83 (3.18)	12.98 (3.99)	13.19 (3.56)	12.60 (3.69)			
	全体	13.48 (3.49)	12.02 (4.18)	10.62 (3.49)	13.20 (3.80)	12.26 (3.82)				
成長	男性	14.48 (3.63)	15.85 (3.66)	12.50 (3.22)	13.86 (4.17)	14.56 (2.22)	14.36 (3.65)	12.60**	5.47**	0.65
	女性	16.61 (2.23)	16.50 (3.89)	14.50 (3.58)	15.58 (3.15)	15.19 (2.27)	15.62 (3.13)			
	全体	15.89 (2.94)	16.11 (3.73)	13.77 (3.56)	15.02 (3.58)	14.95 (2.25)				
衝動・盲目的	男性	14.62 (3.75)	13.30 (4.10)	10.83 (3.67)	12.86 (3.71)	14.06 (3.42)	13.05 (3.94)	0.17	5.44**	0.65
	女性	14.73 (3.48)	13.14 (4.36)	12.10 (3.17)	13.60 (4.19)	13.07 (3.83)	13.37 (3.84)			
	全体	14.69 (3.54)	13.24 (4.16)	11.64 (3.39)	13.3 (4.03)	13.44 (3.67)				
献身的	男性	14.14 (3.17)	12.94 (3.99)	13.21 (3.35)	13.62 (3.11)	13.88 (3.59)	13.47 (3.48)	7.86**	1.05	0.29
	女性	12.61 (3.36)	12.32 (4.40)	11.26 (3.30)	12.30 (3.93)	13.00 (3.76)	12.23 (3.70)			
	全体	13.13 (3.35)	12.69 (4.13)	11.97 (3.42)	12.73 (3.71)	13.33 (3.68)				

** $p < .01$, [†] $p < .10$

「利他的・付加価値」では、性別の主効果、類型の主効果、性別×類型の交互作用のいずれも有意ではなかった。「大切・必要」では、類型の主効果が有意であった。多重比較の結果、両低型がその他の4類型より低かった。性別の主効果は有意傾向であり、男性よりも女性の方が高かった。性別×類型の交互作用は有意ではなかった。「相互関係」では、性別の主効果が有意傾向であり、男性よりも女性の方が高かった。類型の主効果、性別×類型の交互作用は有意ではなかった。「独占・束縛」では、類型の主効果が有意であった。多重比較の結果、両低型が両高型・過敏型より低かった。性別の主効果、性別×類型の交互作用は有意ではなかった。「成長」では、性別の主効果が有意であり、男性よりも女性の方が高かった。類型の主効果も有意であった。多重比較の結果、両低型が両高型・誇大型より低かった。性別×類型の交互作用は有意ではなかった。「衝動・盲目的」では、類型の主効果が有意であった。多重比較の結果、両低型が両高型より低かった。性別の主効果、性別×類型の交互作用は有意ではなかった。「献身的」では、性別の主効果が有意であり、女性よりも男性の方が高かった。類型の主

効果、性別×類型の交互作用は有意ではなかった。

自己愛傾向による類型と恋愛様相

大学生290名のうち、調査時点で交際相手がいると回答した者は84名であり、以下の分析では84名を対象に行った。性別、類型の内訳をTable 4に示した。また、平均交際期間は12.23カ月、標準偏差15.07であった。

Table 4
交際相手がいる学生の性別・類型の内訳

	1.両高型	2.誇大型	3.両低型	4.過敏型	5.中間型	合計
男性	5	10	6	4	7	32
女性	13	5	12	12	10	52
合計	18	15	18	16	17	84

自己愛傾向5類型の恋愛様相の特徴を検討するため、性別（男性、女性）と自己愛傾向による類型（両高型、誇大型、両低型、過敏型、中間型）を独立変数、恋愛様相尺度の3下位尺度と合計点である「恋一愛」得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。Table 5に結果を示した。いずれの下位尺度においても、性別の主効果、類型の主効果、性別×類型の交互作用は有意ではなかった。

Table 5
自己愛傾向5類型における恋愛様相の平均値（標準偏差）と2要因分散分析の結果

下位尺度		1. 両高型 M (SD)	2. 誇大型 M (SD)	3. 両低型 M (SD)	4. 過敏型 M (SD)	5. 中間型 M (SD)	全体 M (SD)	性別主効果 F (1,280)	類型主効果 F (4,280) 多重比較	性別×類型 交互作用 F (4,280)
相対性—絶対性	男性	19.60 (8.91)	24.70 (3.37)	22.50 (4.76)	27.50 (2.65)	24.57 (3.26)	23.81 (5.03)	0.27	2.25	0.72
	女性	20.69 (5.35)	25.00 (5.39)	23.42 (3.45)	22.75 (6.08)	23.90 (5.65)	22.83 (5.21)			
	全体	20.39 (6.25)	24.80 (3.95)	23.11 (3.82)	23.94 (5.74)	24.18 (4.69)	23.20 (5.13)			
所有性—開放性	男性	20.00 (5.10)	23.50 (4.40)	20.67 (6.22)	22.50 (3.11)	22.86 (4.30)	22.16 (4.65)	0.70	0.94	0.62
	女性	18.54 (5.36)	21.60 (5.81)	22.83 (5.52)	21.83 (5.52)	19.80 (5.85)	20.83 (5.16)			
	全体	18.94 (5.19)	22.87 (4.79)	22.11 (4.21)	22.00 (4.94)	21.06 (5.34)	21.33 (4.98)			
埋没性—飛躍性	男性	17.80 (2.49)	18.30 (3.47)	16.17 (4.96)	15.00 (5.29)	18.71 (1.98)	17.50 (3.66)	0.47	0.77	1.23
	女性	15.69 (3.66)	18.40 (4.34)	18.08 (2.58)	18.58 (4.48)	18.20 (3.33)	17.65 (3.70)			
	全体	16.28 (3.44)	18.33 (3.62)	17.44 (3.52)	17.69 (4.79)	18.41 (2.79)	17.60 (3.66)			
恋—愛	男性	57.40 (12.50)	66.50 (9.86)	59.33 (15.55)	65.00 (8.17)	66.14 (8.23)	63.47 (11.01)	0.13	1.46	0.36
	女性	54.92 (11.18)	65.00 (14.09)	64.33 (7.49)	63.17 (14.16)	61.90 (13.48)	61.31 (12.13)			
	全体	55.61 (11.24)	66.00 (10.94)	62.67 (10.64)	63.63 (12.69)	63.65 (11.51)	62.13 (11.70)			

考 察

本研究の目的は、自己愛傾向の類型により、大学生の恋愛イメージ、恋愛様相にどのような特徴があるかを、性差も含めて明らかにすることであった。

自己愛傾向による類型について、先行研究（中山・中谷，2006；清水他，2007, 2008）を参考に、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の平均値・標準偏差をもとに、対象者の得点の組み合わせから、両高型、誇大型、両低型、過敏型、中間型の5群に分類した。両高型は誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向ともに高く、両傾向の特徴をあわせもつ群である。誇大型は誇大型自己愛傾向が高く、過敏型自己愛傾向が低い群である。両低群は誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向ともに低く、自己愛傾向が一般的に低い群である。過敏型は過敏型自己愛傾向が高く、誇大型自己愛傾向が低い群である。中間型は誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向ともに平均的な群である。

恋愛イメージにおいて、性別（男性、女性）×自己愛傾向による類型（両高型、誇大型、両低型、過敏型、中間型）の2要因分散分析を行った。性別の主効果が認められたのは、「成長」と「献身的」であった。「成長」は男性よりも女性の方が高く、女性は恋愛を自分やお互いを成長させるものと捉えている。また、「献身的」は女性よりも男性の方が高く、男性は相手のためなら何でもできる、恋愛は自分を犠牲にするものと捉えている。これらの結果は金政（2002）とも一致している。本研究では加えて、「大切・必要」と「相互関係」で性別の主効果に有意傾向が認められた。「大切・必要」「相互関係」ともに、男性よりも女性の方が高く、女性が恋愛を生活において必要なものと捉

え、相手との相互的な関係を重視する傾向がある。

自己愛傾向による類型の主効果が認められたのは、「大切・必要」、「独占・束縛」、「成長」、「衝動・盲目的」であった。多重比較の結果、「大切・必要」では両低型がその他の4類型より低く、両低型は恋愛を生活に必要なものとは捉えていない。「独占・束縛」では両高型・過敏型が両低型より高く、両高型・過敏型は恋愛とは相手を独占・束縛したくなるものというイメージをもっている。「成長」では両高型・誇大型が両低型より高く、両高型・誇大型は恋愛を自分やお互いを成長させるものと捉えている。「衝動・盲目的」では両高型が両低型より高く、両高型は恋愛を周りが見えなくなり、のめりこんでしまうものと捉えている。

以上から、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の両特徴を併せ持つ両高型は、恋愛へのイメージについて、生活において大切なもの、自分を成長させてくれるものというポジティブなイメージとともに、相手を独占し束縛したい、盲目的にめりこむものというイメージももっている。清水他（2008）は、両傾向を併せもつ青年の特徴について、物事に対する現実的な行動がとりにくく、感傷におぼれやすく情緒不安定になりやすい。また、強い精神的不健康状態にあり、他者信頼の揺らぎが精神的健康の低下につながる可能性を示唆している。恋愛関係においても、自分にとって重要なものであるがゆえに、周りが見えなくなるほどのめりこみ、相手への信頼感の揺らぎから束縛したいというイメージをもつと考えられる。

誇大型は、恋愛へのイメージについて、生活のなかで大切で、自分を成長させるものというポジティブなイメージをもっていた。清水他（2007, 2008）では、

誇大型自己愛傾向の高い青年は、自他に対する強い信頼感を持ち、適応、精神的健康ともに高いことが示されている。恋愛関係においても、自他に対する信頼感から、ポジティブなイメージが高くなったと考えられる。しかし先行研究において、誇大型自己愛傾向の高さは、恋愛関係における認知の歪み（小塩, 2000）、コミットメントの低さ（Campbell & Foster, 2002）、浮気の多さ（Campbell et al., 2002）、攻撃的な方法でパートナーをつなぎとめようとする（Jonason et al., 2010）など恋愛関係をより不安定にするような認知や行動との関連が示されている。清水他（2008）によると、誇大型自己愛傾向の高い青年の特徴として、公的自意識の低さによる自己検閲の弱さが自己中心性につながる可能性を指摘している。このことから、強い自己信頼感や高い精神的健康を持つ反面、周囲が見えなくなることで独善的になる危険性をはらんでいる。恋愛関係において大切や成長といったポジティブなイメージをもっていたとしても、本研究は日記式調査を行っており、実際に交際相手とどのような関係を築いているかは測定できていない。

誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向ともに低い両低型は、生活において大切である、自分を成長させる、相手を束縛したい、恋愛にのめりこむという恋愛へのイメージが他群と比較して低かった。清水他（2008）では、両傾向の低い青年は情緒刺激に動じることが少なく、他者との信頼関係にそれほど執着しない。恋愛関係においても執着が少なく、恋愛へのイメージも乏しいのではないかと考えられる。

過敏型は、恋愛は生活のなかで大切であり、相手を独占・束縛したいというイメージが高かった。清水他（2008）では、過敏型自己愛傾向の高い青年は、自己の行動に自信が持てず、他者に対する強い恐れから、対人関係を円滑に保つことができないことが示唆されている。また、過敏型自己愛傾向の高い者は、パートナーからの拒絶に対して過剰反応（Besser & Priel, 2009）することが示されている。恋愛は大切なものであるがゆえに、拒絶される不安や恐れから相手を束縛したいと考えられる。

中間型は、恋愛イメージについて特徴はみられなかった。清水他（2008）においても中間型の青年は、ほぼ平均的な性格傾向を持ち、明確な特徴がなかった。恋愛においても、大学生がもつ平均的なイメージをもっていると考えられる。

恋愛様相においては、性別（男性、女性）×自己愛

傾向による類型（両高型、誇大型、両低型、過敏型、中間型）の2要因分散を行ったが、性別の主効果、類型の主効果、交互作用のすべてにおいて有意差が認められなかった。高坂・小塩（2015）では、「恋—愛」、「所有性—開放性」、「埋没性—飛躍性」で女性の方が男性よりも高いという性差が認められているものの、本研究では認められなかった。この理由として、分析対象者の人数の影響が考えられる。本研究では、調査時点で交際相手がいる大学生が84名と少なかった。今後は、交際相手がいる対象者の人数を増やし、検討を続ける必要がある。

本研究の結果から、自己愛傾向による類型で恋愛へのイメージに違いがあることが示された。一方で、実際の交際相手を想定した恋愛関係については有意差が認められなかった。自己愛傾向の高い青年の恋愛では、場合によってパートナーを傷つける可能性や、パートナーと長期的に安定した関係を形成することは難しいことが推測される。このため今後は、個人のもつ恋愛イメージだけでなく、実際の交際相手とどのような関係を形成しやすいか、その特徴を明らかにする必要がある。

引用文献

- 相澤 直樹(2002). 自己愛の人格における誇大特性と過敏特性. *教育心理学研究*, 50, 215-224.
- Besser, A., & Priel, B. (2009). Emotional responses to a romantic partner's imaginary rejection: The roles of attachment anxiety, covert narcissism, and self-evaluation. *Journal of Personality*, 77, 287-325.
- Campbell, W. K., & Foster, C. A. (2002). Narcissism and commitment in romantic relationships: An investment model analysis. *Personality Social Psychology Bulletin*, 28, 484-495.
- Campbell, W. K., Foster, C. A., & Finkel, E. J. (2002). Does self-love lead to love for other?: A story of narcissistic game playing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 340-354.
- Foster, J. D., Campbell, W. K., & Twenge, J. M. (2003). Individual differences in narcissism: Inflated self-views across the lifespan and around the world. *Journal of Research in Personality*, 37, 469-486.
- 原田 新(2012). 発達の移行における自己愛と自我同一性との関連の変化. *発達心理学研究*, 23,

- 95-104.
- Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relation: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, 9, 489-508.
- Jonason, P. K., Li, N. P., & Buss, D. M. (2010). The costs and benefits of the dark triad: Implications for mate poaching and mate retention tactics. *Personality and Individual Differences*, 48, 373-378.
- 金政 祐司(2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証——親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から—— 対人社会心理学研究(大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室), 2, 93-101.
- 高坂 康雅(2011). 青年期における恋愛様相モデルの構築 和光大学現代人間学部紀要, 4, 79-89.
- 高坂 康雅・小塩 真司(2015). 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 26 (3), 225-236.
- 神谷 真由美(2018). 大学生の過敏型自己愛傾向の変容 心理相談センター紀要(比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター), 14, 9-15.
- 神谷 真由美・上地 雄一郎・岡本 祐子(2012). 大学生の自己愛的甘えと誇大型・過敏型自己愛傾向との関連 広島大学心理学研究, 12, 127-136.
- 目久田 純一・百瀬 ちどり・越中 康治(2017). 成人期以降の自己愛的脆弱性の発達の变化——高齢者と大学生の比較に基づく考察—— 梅花女子大学心理こども学部紀要, 7, 10-18.
- 中山 留美子(2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程——自己愛における評価過敏性, 誇大性の関連の変化から—— パーソナリティ研究, 15, 195-204.
- 中山 留美子・中谷 素之(2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 小此木 啓吾(1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小此木 啓吾(1999). 精神分析から見た思春期心性 思春期青年期精神医学, 9, 131-144.
- 小塩 真司(2000). 青年の自己愛傾向と異性関係——異性に対する態度, 恋愛関係, 恋愛経験に着目して—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 47, 103-116.
- 小塩 真司(2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎(2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, 78, 9-16.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎(2008). 対人恐怖心性——自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連—— パーソナリティ研究, 16, 350-362.
- Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review*, 93, 119-135.
- 寺島 瞳(2011). 自己愛と恋愛関係 小塩 真司・川崎 直樹(編) 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— (pp. 152-166) 金子書房